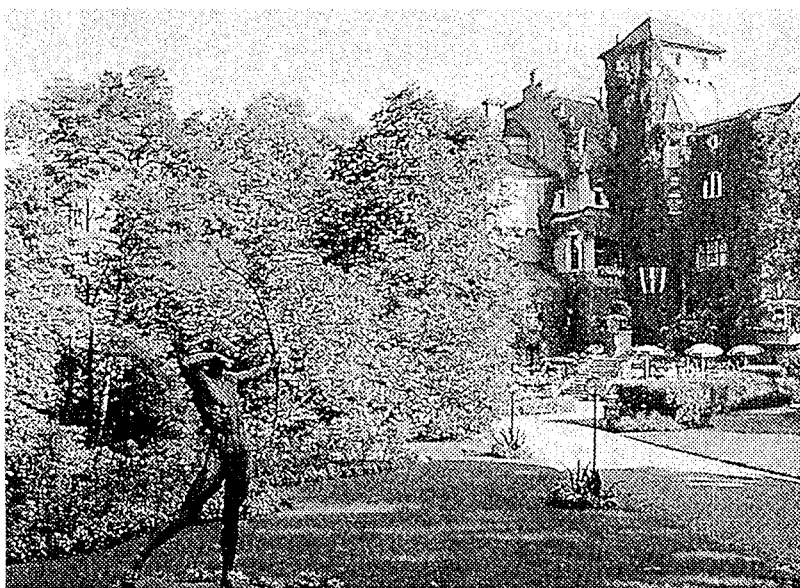


岡田寛の香川新音楽事情 16

香川日唄協会の確かな試み②



オーストリア香川友好協会発足



ザルツブルクのホテル・シュロス・メンヒシュタイン

歴史は夜作られる、というのが本当だ。夜の高松、南古馬場の一角にある「F」は天井のロートレックのポスター画で黒手袋のギルベールが微笑む酒落たバー。このソムリエ美人ママがボクに紹介した全日空キャリアアウマン岡部恵子との出会い

が全てのキッカケ。一九九六年四月に就航した閑空ウィーン直行便の話が、九月の訪唄文化ツアー実現に繋がった。

実際の行動派仕掛人は、役員、池田清一郎の二人。役員は元電通高松支店長で現在香川広告協会理事、池田は元三菱信託銀行高松支店長で今は著名な経営コンサルタント。どちらも県外人ながら香川に住みついた根っからの文化経済人。経済文化人ではない。毅然たる文化志向がバックボーンにある経済人のことだ。これに海外旅行のプロフェッショナル猪股伸夫が加わった。むろん音楽プランやスケジュールはボクの役割。それにしても、どうしてこう香川はよそからのホンモノ文化人のお世話になることが多いのだろう。



岡部恵子さん

旅の目玉は九月五日、志度町の姉妹都市アイゼンシュタット、ハイドンゆかりのエステルハーツィ宮殿。このハイドンザール(ハイドンの間)を中心に市とブルゲンランド州が毎年九月に開催する「ハイドンターゲ(音楽祭)」はウィーン南東五十キロという好位置も手伝って世界の一流演奏家がひしめく素晴らしい内容の十日間だが、日本ではかなりのクラシック通で

首脳には文化人ずらり



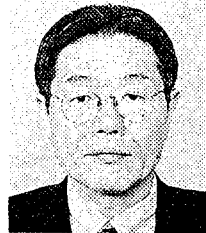
池田清一郎さん

「ハイドン・アカデミー」の流

も知らない。実際、これまでにここを訪ねたのは志度町使節団だけ。わがグループが日本からは過去最大のデレゲーション。メンバーは会う人ごとに「おまえも志度か?」と聞かれる始末。九一年以降、毎年の様にここを訪ねているボクが懇意なライヒャー総裁に座席をお願いすると「せっかくだから、初日のレセプションにもどうぞ」というお招き。思いがけず開幕直前の宮殿祝賀会に出席、ORF(オーストリア国営放送)TVカメラ放列の中、威風あたりを払う国王夫妻の臨席には、しっかり正装でキメてきた流石のボク達もいささか緊張した。



伊賀士健二さん



吉田莞爾さん

「ハイドン・アカデミー」の流

麗な調べ。翌日はウィーンに戻って国立歌劇場のオペラ「ドン・カルロ」初日鑑賞。更にお目当てのザルツブルクでは、モーツァルト記念館やカラヤンの生家、ハイドンやモーツァルトが演奏したという古城跡に建つホテル・シュロス・メンヒシュタインを訪れ、眼下に広がる夕陽の絶景に息をのんだ。

結局、この時の鮮烈な感動の輪が広がって翌九七年五月、オーストリア香川友好協会」が発足。六十年代の国際医学会以来ウィーンに縁の深い三宅洋三を会長に、副会長には事務局をお願いした三越高松店長の吉田莞爾と四国学院大学学長の橋本一仁が就任した。吉田は高松高校出身、ロンドン三越時代からしばしばウィーンを訪れている大の欧州通、橋本の専門は演劇論、英エジンバラ芸術祭の常連だ。かくてわが協会首脳には香川の誇る一流文化人が揃った。

(文中敬称略)

立音楽祭を鑑賞 感動の輪広がる